

人物で語る 日本デンマーク

②4

板倉源太郎

I



板倉源太郎
（「池浦の歴史」より）

板倉源太郎は、一八六八年（慶応四年）八月、碧海郡大浜村東松江（現在の碧南市新川町）の農家に生まれた。身体が弱かったため、百姓にはむかないとみた父は、村内の造り酒屋に奉公に出した。十三歳の時である。その酒屋は東京にも店を持っていたので、翌年、東京の店に行くことになった。二年ほどすると、店の責任者が亡くなり、店を閉めることになったので、再び大浜の店で働くことになった。ところが、十八歳の時、この店も閉店することになり、源太郎たち使用人はやめさせられた。そこで、源太郎は、同じ村の肥料問屋岡本八右衛門の店で働くことになった。

岡本は、店を手広く経営するほか、たくさん山林原野を所有していた。明治用水通水後、碧海台地のあちらこちらで開墾が行われるようになった。岡本も、一八八七年（明治二〇年）から和泉村（現在の安城市和泉町）の開墾を始めた。店で働いていた源太郎が支配人として、多くの人々に交じって三十四町歩を六か年で完成させた。続いて今村大道山（現在の同市今池町）の二十七町歩の開墾も、支配人として一八九二年（明治二五年）から七か年で無事完成させた。

大道山の開墾地が、岡本の事業の失敗からそっくり和泉の神谷八郎の手に渡ることになった。神谷は、開墾地を多くの小作人に分けて耕作させることにしたので、世話役が必要になった。神谷は、引き続き源太郎に管理を任せることにした。

開墾地が岡本から神谷へ渡った折、岡本から贈られた八反歩に、神谷からも借りて四町二反歩、裏作も加えると延べ六町歩余りを、初めは源太郎と三人の男女使用人と共に耕作した。動力農具はなく、畜力利用も知らない、全く人の手が頼りであった。

源太郎は農家の出身でありながら、本格的な農業の経験は全くなかった。支配人として和泉の開墾地で大勢の人たちと寝食を共にして働いたのが最初だった。十年余り開墾事業に従って、農業を学んだのである。

開墾地での入植者の苦労は並たいていのも

のではなく、新天地を夢見た人たちの中で、途中で脱落していく人もあった。そうした人



板倉農場（現在の安城市今池町）

たちを見聞している源太郎自身も、少年のころから奉公に出て、奉公先の事業の失敗からとはいえ、やめさせられ、得るものがなかったという挫折を経験している。しかし、源太郎は、悲

運や苦労に押し流されることなく、強い意志でそれに立ち向かい、乗り越えていった。神谷が、源太郎に大道山の管理を任せ、三町歩余りの田地を貸すことにしたのも、その人物を見抜いたからである。

源太郎は、開墾地の支配人はその土地の指導者、リーダーだという自覚を強く意識したのである。人一倍働いた。単に一生懸命働くのではなく、農業の合理性を追求したのである。昭和初期、安城が「日本デンマーク」と全国に知られ、多くの視察者が訪れた代表的な農家、板倉農場の経営者が源太郎である。

文 中村幸雄